

第2回 山元町震災復興有識者会議 議事録

○委員一覧○

	所属等	氏名	専門	備考
1	東北大学大学院工学研究科 災害制御研究センター長	今村 文彦	防災、津波	宮城県震災復興会議 石巻市復興ビジョン懇談会 岩沼市震災復興会議
2	宮城県建築住宅センター 理事長	三部 佳英	技術士（都市及び 地方計画）	
3	東北学院大学教養学部 地域構想学科 教授	柳井 雅也	経済地理学	石巻市復興ビジョン懇談会
4	東北工業大学工学部 建築学科 教授	石井 敏	建築、高齢者施設	
5	(有)ダハプランニングワーク 代表取締役	吉川 由美	文化、教育、観光	
6	国立病院機構宮城病院 病院長	清野 仁	医療	
7	岩手大学農学部 共生環境課程 教授	広田 純一	農業	東日本大震災復興構想会議

○会議の流れ

- 1 開 会 (山元町震災復興推進課 課長 鈴木光晴)
- 2 あいさつ 齋藤俊夫町長 あいさつ
- 3 第2回震災復興有識者会議
 - (1) 委員紹介、資料の確認
 - (2) 前回欠席の有識者の自己紹介

○委員からの意見

今村委員	宮城県沖で地震が発生したのは評価どおりであったが、その規模が格段に違っていた。津波の実態を評価して、今後の減災につなげていきたいと考えている。
柳井委員	経済地理学を理論的に研究しており、自分が学んだことを被災地で役立てたいと考えている。ハード面だけでまちを強くするだけでなく、雇用など暮らして良かったと思えるようなまちづくりを考えていきたい。
【事務局による山元町震災復興基本方針（素案）の説明】	
三部委員	各委員、忌憚のないご意見をお願いしたい。
今村委員	減災に向けた山元町の資料はよくまとめられていると感じました。気づいた点などを3点申し上げる。 ①資料3の3頁に浸水深が表示されているが、坂元駅を中心にして浸水深が変化しており駅を中心に減災されてきているようである。 5頁をみると、通常は3mで建物の倒壊被害が生じると考えられているが、山元町では2mで被害が発生しており、流速が大きかったと考えられる。被害を防ぐ方法が必要である。内陸部の緑色と黄色で色分けしたエリアで考えられているのは妥当かと思う。 ②防災緑地や多重防御も限界がある。流速が早いことから盛土をしても津波は乗り越えてしまう。緑地ゾーンはモニュメント設置、公園化するなど震災を語り継ぐ場所としているのは良いが、リスクが高い場所への来訪者に対しても安全対策が望まれる。 ③資料1の12頁で教育に触れているが、防災教育をやって欲しい。成長に合わせた防災教育が必要である。
柳井委員	①防御体制を整えた後をどう考えるかが重要である。過去震災にあった奥尻島を例にとると、4,700人の人口規模の漁港が高台移転し、漁業従事者も高台へ安全に避難する通路を整備したが、10数年経って1,600人が減少した。 これから学んだことは「何もしなければ地域は衰退していく」ということ。新しい経済活動を起こしていくことが必要である。例えば、「いちご」に着目すれば、加工業、販売（道の駅、海外輸出など）があれば雇用機会は拡大、食の創造へと発展が考えられ、「いちご」からでもいろんなビジネスモデルができる。コミュニティビジネスとの連携も考えられ、また、障害者の雇用など福祉へも関わりも考えることもできる。たとえばこのような経済活動の中で「いちご」の団地化の目的が位置

	<p>づけられる。</p> <p>②小さな商店を大切にしよう。大きな商業施設では雇用された人や東京の納入業にしか効果がない。小さな商店であれば地域でお金が回る。</p> <p>今はいろんなことが白紙に戻っているので、今までとは違ったことも出来る。将来の山元町を担う10代20代30代の人々が頑張ることをやるべき。</p> <p>単に3.11に戻るだけでなく、新しいコミュニティづくりが大切であり、ここでは「攻め」の地域づくりを提案しようと思っている。</p>
広田委員	<p>基本方針と土地利用は概ね良いのではと感じた。</p> <p>①-1 居住地の高台移転は理解するが、アンケート結果をみると居住地の選択肢を増やすべきではないか。ストロベリーロード付近もあり得るかと思う</p> <p>①-2 「いちご」もこれまでは個人経営であったが、将来、団地化やグループ経営などの選択肢もあると良い。</p> <p>②住民参加の問題ですが、計画と実践を担う住民との体制（例えば、若手の集まり、分野に応じた集まりなど）が欲しい。</p> <p>③住民意向調査は時間の経過とともに変化する。住民側としては先行きが不透明な状態とそうでない状態とでは結果も異なる。意向調査を丁寧に把握して活用していくことが大切である。</p>
吉川委員	<p>短い期間で方針がまとめられ、他の自治体より早くまとめられて良いと感じた。</p> <p>スペースや農業機械などを共有（シェア）していくことが「チーム山元」の原動力にもつながると思う。</p> <p>また、公園ゾーンは安全性が確保できれば良い提案だと思う。決して機能だけ重視したものがまちづくりではなく、居住する場所と離れていない所にコミュニティのつながる場を作っていくことがコンパクトシティだと思う。</p>
石井委員	<p>アンケートを踏まえた課題と方針の方向性は良いのではと考えている。アンケートは速報ですので、今後クロス分析するともう少し色々なことが判ると思う。例えば、5頁の町内に居住地を求める7割の人たちが、どうしたらこの町に住めるかというヒントも隠れているのではと思う。</p> <p>今までの暮らしをすべて捨てるわけにはいかないが、将来の発展も考えていかなければならないことは重要である。</p> <p>少子高齢化は、どのまちも同じ問題を抱えており、どういう暮らしを作っていけるのかを見せることが必要である。これからの市町のモデルにもなると思う。</p> <p>公営住宅をどれだけ、どこへ作るかは、その住まい方を検討していくのも復興まちづくりには大切だと思う。</p> <p>復興まちづくりは、暮らしてきた歴史や文化があるので、住民の思いを入れたまちづくりを進めていくことが大切である。</p>
清野委員	<p>今日の方針は委員の方々が概ね合意しておられるが、私も賛成である。</p> <p>スピード感が重要で、特にJRの再開はルートが何年先になるか不明瞭ではあまり遅すぎる。それを早く実現してもらいたい。</p>

	資料にある図のように、路線が山側に行くと用地買収に多大な時間と費用がかかる。国道6号の東側でルートを引き、期間と費用を短縮・縮減できるのではと思う。医療は、医師不足でまともな地域医療に貢献できていないのが現状である。雇用面で通勤不便が課題になっているのは事実で、通勤・通学の利便が良くなると確実に医師確保ができる。また、10頁の産業の「いちじく」も商品化できないかと以前から考えていた。
三部委員	基本方針の中で行動計画が重要で、具体的な内容やスピード感が重要という意見傾向である。
町長	JRとの話では、用地だけ決まれば3年程度で再開できる想定である。まちづくりをしようとした時は、町全体の理解を仰ぐことが鍵と考えている。
副町長	土地利用の核となるJRは早急に結論が必要で、農地もどういう制度があり、用地問題もどんな手法があるかなど検討を早めていく。これまでの制度の枠組みを越えて、JRに整備してもらいたい。
柳井委員	計画は、特区制度をもっと前面に出して提案することが良いのではと思う。農業特区構想を入れれば2年税金免除、3年間税金1/2などが受けられる。特区構想（防災教育、森林学習などを盛り込む）をテコにしていく提案があっても良いのでは。もっと「山元町らしさ」を出したほうが良い。
今村委員	鉄道は浸水深1.5mで浮かんでしまうので、JRルートの南側は早く決まるだろう。駅は従来のように2駅置くのか集約するのも論点である。
広田委員	山元町はどう生き残っていくか。山元町は仙台に通勤可能であるので通勤で生きていける。田園観光都市でもいける。鉄道の復旧が早い方が良い。山元町の主要な機能は仙台へのアクセス改善で補っていき、農業などの田園環境が目指すべき姿かなと思う。用地買収が大変なら、ルートは柔軟でよい。
会場の 震災復興委員	「山元町の特徴を活かしていく」「若い人が住めるまちにしていく」まちづくりを期待したい。
事務局	住民の意見が大切である。案がまとまってきたら住民とコンタクトしてまとめたい。
三部委員	JRが「どのルート」、「どこに駅か」、それを中心にまちをつくり、住まい方を検討し、これらを大きな図面で表現してより具体的に進めていくこととしたい。主体は地元であり、力と時間を出してもらって頑張ってもらいたいと思います。
事務局	ありがとうございました。